

三、草創期の農学部と安城キャンパス

◆山積する課題

ようやく誕生した農学部と安城キャンパスですが、創設された当初はあまり実態があるとはいえない状況でした。前章で見たように、教員は最初四人だけでしたし、新入生も最初の二年間は豊川分校や名古屋市の瑞穂分校で教養課程を修めなければならぬので、農学部で講義を受けることはありません。

しかも、愛知学芸大学安城分校の岡崎への移転が完了するまでの間は、安城キャンパスも思うようには使えませんでした。そのため当初の農学部事務室は、名城キャンパス（本部・文学部・教育学部・法学部など）の附属図書館内にありました。教員の研究室も、東山の理学部、高蔵の工学部、安城の愛知県農事試験場などに「間借り」していたのです。

そのほかにも課題は山積していました。実は、文部省の農学部設置認可には、次のような条件が付けられていたのです。

- (1) 一九五二（昭和二七）年度中に図書館を建設するように計画を立てること。
- (2) 研究用農場を近接地に設けること。
- (3) 図書、標本機械器具の整備充実をすること。
- (4) 学科の増設、既設学科の変更については、当分の間大学設置審議会に協議すること。
- (5) 教員組織については、これが充実するまでは大学設置審議会に協議すること。
- (6) 二年以内に必要な整備拡充をおこなって、大学としての完成を期すること。

これらの事項については大学設置審議会に報告し、必要があれば同審議会が審査するというものでした。要するに、一人前の学部になれるかどうか、最初の二年間は文部省が指導するということでしょう。

◆安城キャンパスの整備

一九五二（昭和二七）年度になると、教員や講座が増えたため、安城キャンパス内の愛知学芸大学附属安城中学校の校舎の移管を受け、事務部と新設講座が暫定的に入りました。またこの年には、正門から見て右側に、木造二階建ての白い校舎二棟（一号館、二号館）が建築され、農学科と畜産学科の研究室がここに移りました。やがて愛知学芸大学安城分校の移転が完了し



建築中の農学部新校舎



農学部本館とその前庭

ため、諸施設を自由に利用することができるようになり、名実ともに安城キャンパスが農学部のものとなったのです。その後、校舎の改造や増築、実験施設の増加などがありました。キャンパス内の構造・景観が劇的に変わるようなことはなかったようです。

設置の条件としてあげられていた研究図書も、学部存立の根幹にかかわる大きな課題でした。これについては、思いがけぬ所から解決しました。東京大学の矢内原忠雄やないはら総長（植民政策学者、戦前期にはいわゆる「矢内原事件」で一度は東京帝大を追われた）が名大農学部を訪れた際、東大農学部の図書整理で出てきた重複文献を提供する申し出があったのです。この二万五〇〇〇冊もの農学研究文献に愛知県からの寄贈を加え、農学部の蔵書は確保されたのでした。

◆実習・実験施設の充実

現在でもそうですが、とりわけ当時の農学部には、研究にも教育にも、充実した実習・実験施設が必要でした。農学部創設にあたり、それらの施設は用意されましたが、多くは借用であり、創設後にその本格的な確保がはかれることになりました。

農場は、安城キャンパスの隣接地に安城市などからの提供を受け、五四年には文部省から正式に農学部附属農場として認可され、安城農場（約四万六〇〇〇㎡）と呼ばれました。さらに

同じ五四年には、豊川市に約一三万二〇〇〇m²の農場を確保しました。これは、名大豊川分校にあった教養部が名古屋へ移転となったので、その土地と施設を利用したものです。この豊川農場は、広さを生かして機械化農業の実験施設となりました。現在は愛知県立豊川工業高校のキャンパスになっています。

演習林は、林学科の教育・研究に不可欠なものです。広大な林野が必要とされるため、十分な整備が難しい施設でもありました。そこで一九五五年、愛知県北設楽郡きたしたら稲武町内の、町長が管理する部落有林を、分収契約によって演習林として使用することになりました。林野の分収契約とは、土地所有者（地主）と立木所有者（経営者）が異なり、そこから上がる収益を両者が一定の割合で分けることを言います。名大はこの契約で、約一六五万m²の林野の、六〇年間の地上権を取得しました。現在でも名大は、フィールド教育支援センター稲武フィールド（旧大学院生命農学研究科附属演習林）として、同林野約一四四万m²の地上権を持っています。

◆講座・スタッフの拡充

四学科四講座でスタートした農学部も、その後毎年のように講座が充実し、一九五五（昭和三〇）年に農学部の講座が省令化された時には四学科二一講座となりました。以後、少しずつですが講座は増え、一九六五年には林産学科が設置され、東山移転時には五学科二五講座



初期のスタッフ。前列右が増井清初代学部長、前列中が雨宮育作第三代学部長。

技官・事務官の数も同様の推移で、七〇人前後でしたが、人を超えました。その後も一〇〇人前後です。スタッフの総数では、一九六二年に大幅に補充され一〇〇から一六〇人、六三年以後は二〇〇人前後というところでした。

◆大学院農学研究科の設置

名古屋大学に新制大学院が設けられたのは一九五三年度からです。これはほかの国立大学と同じで、四九年に入学した新制第一期生が卒業する年度に合わせたものでした。ただし、農学

になりました。同じ時期の工学部と理学部の急激な講座増には遠くおよびませんが、この両学部以外はみな同じようなものでした。

教員の数も、創設当初は四人でしたが、講座増に比例して増加しました。ただそれが一段落すると増加も止まり、安城時代はだいたい八〇人から九〇人あたりを前後しています。

部と医学部に設置されたのは五五年度です。医学部は、修業年限が他学部より二年長いためですが、農学部の場合は新制でのスタートが二年遅れたからにほかなりません。

また、当時の大学設置審議会の審査は厳格なもので、安城キャンパスやその他の施設の整備が不十分だったこともあり、大学院設置の許可が出るかどうか、勝沼精蔵総長が心配し、雨宮育作農学部長ですらあやぶむほどでした。専攻の設置のあり方をめぐって、文部省と農学部の意見対立もあつたようです。一九五五年二月、文部省による安城キャンパスの実地調査が行われましたが、結局は四学科の上にそれぞれ専攻の設置が認められ、七月一日に名古屋大学大学院農学研究科が正式に発足しました。

ただ大学院生の定員については八四人と、申請の半分ほどしか承認されませんでした。さらに承認の条件として、農場・演習林の整備促進、標本の増強などがあげられていました。

◆学生数の推移

学生数は、安城時代の定員は、最後の一九六五年度を除いては一学年一一〇人と変わりませんでした。卒業者数で見ると一番多い年でも八四人で、定員を大幅に割っています。特に第一回と第二回の卒業生は、それぞれ二一人、二六人という少なさです。安城時代には、全部で約七〇〇人の学生が農学部を卒業しました。

一九五八年のデータによると、当時の名大農学部は、本来は他学部を第一志望にしてい、第二志望で入学して来る者の割合が教育学部の次に高く、入試に合格しながら入学しない者の割合が最も高い学部でした。さらに入学した後も、転学部や他大学への編入学を望む者が少なくありませんでした。

また教養課程を終えたあとは、農学部の学生だけが名古屋市を離れ、見知らぬ安城へ行かなければなりません。最初から分かっていることとはいえ、不安な気持ちになる学生もあつたはずで。

一九五八（昭和三三）年、のちに学生部次長となる牧島久雄教養部助教授は、独自に農学部新入生を対象にしたガイダンスを実施しましたが、その一環として安城キャンパスの見学会を企画しています。その日一日、新入生にキャンパス全般を開放するというもので、好評を博したようですが、それだけ学生の不安が強かったことも示しています。

また、現在の名大農学部は約七割の学生が大学院に進学しますが、安城時代においては進学者はむしろ少数派でした。だいたい一割から二割程度で、東山移転に近くになってようやく本格的に増加し始め、直前の段階で五割程度になりました。全体としてみれば、安城キャンパスの学生の多くは学部生であつたといえます。